

東京芸術劇場presents

井上道義&読売日本交響楽団 マーラー／交響曲第3番

奇跡を呼ぶ、 マエストロ道義と未来の 声楽家たちの出会い

首都圏大学合同コーラス！ これまであるようでなかった。たと思いついても、各校間の調整の煩雑さを考えるなら諦めるのが普通だろう。その夢に終わりそうな企画を現実のものにしてしまったのが、井上道義と東京芸術劇場の破天荒コンビだ。2018年10月3日、初の試みとなったマーラー：交響曲第8番「千人の交響曲」は、混沌、失敗、焦燥の渦巻く準備期間を経て、最後には学生たちの無尽蔵のエネルギーが爆発した勝利の凱歌となった。合唱総指揮の任にあった私にとっても感動的な時間であり、「ああ、この企画が、この先何年もつづきますように！」と祈ったものである。

そして本年、再び井上道義が降臨する。ますます関係を深める巨匠と読売日本交響楽団による爽やかなマーラー「3番」。二群の巨大な混声合唱団を擁した長大な「8番」に較べると合唱の比率は少ない(しかも、女声合唱と児童合唱



井上道義

池田香織

撮影:井村直人

のみ)が、このペテロの否認とイエスの赦しを題材とする一片のメルヘンに於ける合唱の役割は重要である。今回、合唱指揮を務めるのはアルト独唱者でもある池田香織。第一線で活躍する歌姫のレッスンや歌唱を通じ、学生たちは多くのことを学ぶだろう。発声について、ディクショ(発語法)について、歌手の身体作りについて、そして、レッスン現場での態度から舞台上に立つ心構えに至るまで。指揮者、独唱者、オーケストラ…プロ中のプロと未来の音楽家たちとの出逢いがどんなに美しい化学変化を見せてくれるのか!

文:福島章恭(合唱指揮者・音楽評論家)

12月6日(金) 19:00開演 コンサートホール

詳細はP17へ

曲目:マーラー／交響曲第3番 二短調

指揮:井上道義 アルト:池田香織

コーラス:首都圏音楽大学合同コーラス(合唱指導:池田香織)

児童コーラス:TOKYO FM 少年合唱団 管弦楽:読売日本交響楽団

NHK交響楽団 演奏会

ロシア音楽に、 しなやかに活きのいい ラテンの色彩を添えて

現在もっとも活きのいい指揮者は誰と問われたら、エラス・カサドの名前を真っ先に挙げたい。スペインのグラナダに生まれた41歳。オーケストラを細部に渡って表情豊かに歌わせ、グルーヴ感たっぷり躍動させる、正真正銘のラテン系だ。

軽快かつ柔軟。なんといっても響きを作り出す感覚がずば抜けて優れている。柔らかに音を重ねて官能性を香り立たせたかと思えば、シャープなリズムで全体に敏捷な動きを与える。サッカーでいえば、アイマールやシャビ、ダビド・シルバといったプレイヤーのスタイルを彷彿とさせるファンタジスタな音楽だ。

そのエラス・カサドがNHK交響楽団を指揮し、ロシア音楽を中心にしたプログラムを披露する。

リムスキー・コルサコフの「スペイン奇想曲」は、スペインの民謡や舞曲をもとに華麗な管弦楽曲に仕立てた作品。スペインをモチーフにしたロシア作品を



パブロ・エラス・カサド

ダニエル・ハリトノフ

スペイン人が指揮することで、沸き立つような感興をもたらしてくれるはずだ。

続くリストのピアノ協奏曲第1番では、ロシアの新鋭ハリトノフが登場。2015年のチャイコフスキー国際コンクールで第3位入賞した期待の21歳だ。困難な技巧が要求されるこの曲でも、洗練されたテクニックを発揮、絢爛なコードを築いてくれよう。話題の指揮者と神童ピアニストの化学反応も楽しみだ。

後半は、チャイコフスキーの交響曲第1番「冬の日の幻想」。この曲、エラス・カサドにはセントルークス管との録音がある。ラテン的な明るく繊細なバランスのなかで、曲中ふんだんに盛り込まれたロシア民謡を切々と歌わせていたのが印象的だった。今回は、機能性に定評があるNHK交響楽団をエラス・カサドがしなやかにドライブ。ロシアの大地に爽やかな風が吹くだろう。

文:鈴木淳史

12月14日(土) 14:00開演 コンサートホール

詳細はP17へ

曲目:リムスキー・コルサコフ／スペイン奇想曲

リスト／ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調

チャイコフスキー／交響曲第1番 ト短調「冬の日の幻想」

指揮:パブロ・エラス・カサド ピアノ:ダニエル・ハリトノフ 管弦楽:NHK交響楽団

ベートーヴェン生誕250周年記念

ミーツ・ベートーヴェン・シリーズ Vol.1 仲道郁代

新しいベートーヴェンとの出会いを求めて

仲道郁代のベートーヴェン演奏ほどに作品への敬愛と慈しみを感じさせるピアニストはいない。個々のソナタ固有の美と作曲者が託した真のメッセージを求め続ける探究者なのだ。

半世紀ぶりに巡ってきた大きなメモリアル・イヤー、ベートーヴェン生誕250周年は奇しくも2020東京オリンピックと重なる。古代ギリシャのオリュンポス祭が体育競技会だけでなく詩作競技も行われていたように、今日のオリンピックにも文化プログラムが並行する。1770年12月16日(17日受洗日)誕生の楽聖ベートーヴェンの記念年はまさに1年間に及ぶ音楽文化プログラムということになる。東京芸術劇場が5人のピアニストによる「ベートーヴェンとの出会い: ミーツ・ベートーヴェン・シリーズ」を年間通して開催する。新年早々にスタートするシリーズのトップ奏者が仲道郁代、シュタイン製、ブロードウッド製そしてモダンピアノの3台を弾き分けてのトーク・コンサートということで今から期待が膨らむばかりだ。



ピアノの発展とベートーヴェンのピアノ音楽の変遷

ベートーヴェンの生涯はピアノという楽器の進化発展の歴史と軌を一にしている。19世紀初頭の音楽史に燦然と輝くベートーヴェンの交響曲、弦楽四重奏曲そして協奏曲の創作はある期間に集中している。しかし、ピアノ・ソナタだけが40年という長い創作期に点在するのだ。ボン時代、10代前半のベートーヴェンの家にあった鍵盤楽器は小さなクラヴィコードだけであった。1788年6月にヴァルトシュタイン伯爵から贈られたシュタイン製の新しいフォルテピアノはベートーヴェンを驚喜させたに違いないが、まだ音域は5オクターヴ(F₁~f³ファ~ファ)に限られ、足(ペダル)で操作するダンパーもなく、機動性の悪い膝椅子(ニー・レバー)操作のダンパー装備の楽器であった。1792年11月以降のウィーン時代初期にはフルター製やシャントツ製の楽器を使っていたが、基本的には同じ5オクターヴ音域あるいは高音域に長2度広い(F₁~g³ファ~ソ)の楽器で、ペダル・ダンパーもなかったが《悲愴》ソナタや《月光》ソナタが作曲されている。1803年初夏から使い始めたエラル製ピアノがペダル操作のダンパーを備えた初めての楽器で、音域も高音域に5度広い5オクターヴ半(F₁~c⁴ファ~ド)を持ち、打鍵機構もそれまでのウィーン式アクションとは異なる、重厚で音の強度幅の広いイギリス式アクションであった。この楽器で作曲したのが《ヴァルトシュタイン》や《アパッショナータ》であった。ピアノ製作はさらに進化し、1810年代後半には低音域に拡大されたナネット・シュトライヒャー製の6オクターヴ(C₁~c⁴ド~ド)あるいは高音域に拡大されたブロードウッド製の6オクターヴ(F₁~f⁴ファ~ファ)の楽器を手にするようになって、《ハンマークラヴィア》や最後の3曲セットのソナタが繰り広げる壮麗なピアノ音楽の世界を開花させたのである。

ベートーヴェン音楽探究者としての仲道郁代

仲道郁代はベートーヴェンのピアノ作品がその作曲当時に使っていた楽器の表現特性を最大限に反映させて作曲されていることを深く理解しているピアニストのひとりだ。ソナタ全曲演奏会シリーズを全国各地で数次にわたって繰り返し、埼玉でのレクチャー・コンサートでは作曲家の故諸井誠と組んだ全ソナタの徹底的アナリゼ(作品分析)をプレ・コンサートとして行っていた。その後、仲道はモーツァルト研究の第一人者海老澤敏とのコラボレーションによるモーツァルト・ソナタ全曲演奏会でも高評を得た。その結果、まさにモーツァルトを通してベートーヴェン音楽の解釈をさらに深化させたのである。モーツァルト演奏で得た18世紀の歴史演奏様式による装飾法、強弱法等々を今や仲道はオリジナル楽器での演奏表現で実践している。有田正広指揮のクラシカル・プレイヤーズ東京と組んだ協奏曲演奏会シリーズも仲道に大きな力を与えたに相違ない。仲道はオリジナル楽器で確認した表現効果をモダンピアノでどのように生かせるかという新たな次元の演奏に挑んでいる。今回の演奏会では彼女のダンパー・コントロールと打鍵タッチ・コントロールによるダイナミクスの多彩な変化に注目したい。ペダル・ダンパーのないシュタイン・ピアノで《悲愴ソナタ》冒頭グラヴェがどのような響きの世界を描くのか。「不滅の恋人」アントーニエの娘マキシミアネに献呈した抒情溢れるロマン主義ソナタ第30番をブロードウッド・ピアノにいかにかき合わせるのか。そして、《月光ソナタ》。仲道の想像力と創造力の閃きに期待したい。

文: 平野昭(音楽評論)

2020年1月10日(金) 19:00開演 コンサートホール 詳細はHPへ

曲目:【フォルテピアノ(シュタイン)】ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」

ピアノ・ソナタ第14番「月光」より第1楽章

【フォルテピアノ(ブロードウッド)】ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第30番

【モダンピアノ(ヤマハCFX)】ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第14番「月光」全楽章

ピアノ・ソナタ第21番「ワルトシュタイン」全楽章

フォルテピアノ、ピアノ: 仲道郁代

東京芸術劇場 海外オーケストラシリーズ

フィルハーモニア管弦楽団

「サロネン時代」の集大成となる 3つのプログラム

現代屈指の名指揮者サロネンと、
ロンドンを拠点とするフィルハーモニア管弦楽団。
長年にわたる名コンビがついに最終シーズンを迎える。



エサ=ベッカ・サロネン

©benjamin eatolvega

伝説のはじまりは突然に

フィンランド出身の指揮者エサ=ベッカ・サロネンの伝説は、1983年に始まった。サロネンはティルソン・トーマスの代役としてロンドンのフィルハーモニア管弦楽団の指揮台に立ち、マーラーの交響曲第3番でセンセーショナルな成功を収めた。この伝説の名演は、当時25歳の無名の若者を一夜にして音楽界の寵児へと押し上げる。

世界の主要オーケストラから次々と招かれることになったサロネンだが、彼にとって出発点であるフィルハーモニア管弦楽団は常に特別なオーケストラであり続けた。1985年から94年までは首席客演指揮者を、2008年からは首席指揮者兼アーティストック・アドバイザーを務めている。指揮者とオーケストラの関係としては、現代では珍しいほど長期にわたって強い絆で結ばれてきた。ともに、伝統にとらわれず、先進的で、チャレンジングな気風を持っていたからでもあるのだろう。

だが、ついにサロネンがフィルハーモニア管弦楽団を去る時が来た。今や61歳となったサロネンは(とてもそんな年齢には見えないが)、今シーズンをもって同楽団を退任し、アメリカのサンフランシスコ交響楽団で音楽監督に就任する(奇しくも代役デビューのきっかけとなったティルソン・トーマスの後を継ぐことになった)。

気迫が伝わる濃密なプログラム

サロネンとフィルハーモニア管弦楽団が、2020年1月に披露するのは、いわば彼らにとっての集大成といえるような3つのプログラムだ。オーケストラに高度な演奏能力を要求する曲目が並んでおり、プログラムを見ただけでも

彼らの気迫が伝わってくる。

1月23日のプログラムではストラヴィンスキーのバレエ音楽『春の祭典』が演奏される。このコンビによる同曲は以前の来日公演でも演奏されたが、客席が沸きに沸いて、オーケストラが舞台から退いても拍手が鳴りやまず、サロネンのソロ・カーテンコールが2度もあったのを思い出す。細部にまでアイデアが凝らされた独自の『春の祭典』になるのでは。また、作曲家としてのサロネンにも光が当たる。名手トゥルルス・モルクを独奏に迎え、サロネン作曲のチェロ協奏曲が演奏される。これはヨーヨー・マが2017年に初演した作品だ。

1月28日の公演ではストラヴィンスキーのバレエ音楽『火の鳥』(1910年原典版)と、庄司紗矢香の独奏によるショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番他が演奏される。国際的に活躍する庄司紗矢香への注目度は高い。スターリン時代のソ連で書かれたこの協奏曲は、ショスタコーヴィチが当局からの批判を恐れて、いったんはお蔵入りにしたといういわくつきの作品。当時の体制下ではあまりに危険すぎる作品だったのだろう。庄司は「第1楽章やカデンツァにある凍りつくような恐怖を含んだ静けさは、あの時代を生きずには書かれなかった。カデンツァからフィナーレの狂気はロシア国民の典型的なメンタリティ。ショスタコーヴィチが真の天才であったことを実感させる一瞬も聴き逃さない名曲」と語る。

1月29日のプログラムは、サロネンの近作である「ポルクス」と、マーラーの交響曲第9番の2曲。サロネンの今を伝える前者と、交響曲というジャンルの終着点とも呼ぶべき、別れの曲である後者。「最後はこれしかない」というプログラムだ。万感胸に迫る思いで、マーラーの消えゆくような終結部を聴くことになるはずだ。

文:飯尾洋一(音楽ジャーナリスト)

2020年1月23日(木)・28日(火)・29日(水) 各19:00開演 コンサートホール

詳細はHPへ

指揮:エサ=ベッカ・サロネン(首席指揮者&アーティストック・アドバイザー) チェロ:トゥルルス・モルク ヴァイオリン:庄司紗矢香
管弦楽:フィルハーモニア管弦楽団

2020年1月23日(木)

曲目:ラヴェル/組曲『クープランの墓』
サロネン/チェロ協奏曲*日本初演
(チェロ:トゥルルス・モルク)
ストラヴィンスキー/バレエ音楽
『春の祭典』



トゥルルス・モルク
©Johns Boe

2020年1月28日(火)

曲目:シベリウス/交響詩『大洋の女神』op.73
ショスタコーヴィチ/ヴァイオリン協奏曲第1番
イ短調 op.77
(ヴァイオリン:庄司紗矢香)
ストラヴィンスキー/バレエ音楽『火の鳥』
(1910年原典版)



庄司紗矢香
©Kishin Shinoyama

2020年1月29日(水)

曲目:サロネン/ポルクス
マーラー/交響曲第9番
二長調